

選評

石川喬司

〈梅一輪告げる人なき部屋の闇〉

一周忌に刊行された『横溝正史追憶集』におさめられた孝子未亡人の句である。それぞれに興味の異なる五篇の最終候補作品を読みすすめながら、いつも心の片隅にこの句があつた。

受賞作となつた平龍生氏の『脱獄情死行』は、戦争という歴史の闇の中に深く沈んでいた一輪の妖花の香りを見事に嗅ぎあてた秀作である。作者は綿密な取材にもとづく貴重なデータを血肉化し、抑制のきいた散文で忘れがたい物語に結実させている。戦争と性を主題にした犯罪小説の白眉といつていいのではないか。謎の要素にとぼしいのが難点かもしれないが、ここには人間性の深淵という形での謎があり、「……テーマ、傾向、手法、スタイルにおいて野心的な試みに富んだ幅広い作品」という横溝正史賞の趣旨からしても、第三回目を飾るにふさわしい授賞といえるだろう。

（後略）

大藪春彦

今回・選考会が始まる前は、票が割れるのではないかと思っていたが、案外すんなりと『脱獄情死行』に決定したとはよかった。受賞作品は、著者の、女主人公への思い入れの情念から発せられる筆力に加え、比較的若いにもかかわらず、戦時中の神戸の様子とか木地を造る作業等、よく調べてあることには感心した。前にオール読物新人賞をもらつてから、フリーラ

イターをしてきた苦節二十年の努力が実を結んだといえるのだろうか。破傷風のことなどにみる、すぐに治る間違いはともかく、この作品は、痴情小説の形を借りた反戦小説・犯罪小説とも解釈可能なのがユークであつた。(中略)最後に、狭義ではミステリーとは考えられなくとも、幅広い解釈のミステリーの範疇に含め得る、『脱獄情死行』の受賞は、今後の応募への影響を考えると楽しみなことである。

罪と罰への肉迫たる「秀編

荻 昌弘

『脱獄情死行』という大な収穫を得たことを、心から欣喜雀躍したいとおもう。或いは、これは推理小説ではない、という反論があるかもしれない。確かに、狭義の概念では、知的な推理意志を主エネルギーにした小説でないこと、明らかだろう。むしろバッキリ、犯罪小説である。しかし、推理小説にしろ犯罪小説にせよ、ともに、根は、人間が犯す業としての「罪」と、その「罰」という贖い、償いの追究である。それであるからには、日本の読物として近来の成果である、この「罪と罰の肉迫」たる秀編を、堂々と正面から推すことこそ、今は亡い横溝正史氏の文学観にも添うことではないか、と私は付度した。だいち、これだけの迫力・説得力をもつ魅惑的な独創作品を、賞から除けてしまう、などという無謀さじたい、考えようもないことではないか。綿密な調査力。筆力と自信に裏付けられた精密な細部描写。乾質で即物的な性表現。その上に立つて作者は、まったく情緒や媚びを排した地点で、「性の歓喜が即、人間としての自

立であり得た」女人像の充実を、造型し得ている。殊に、時代、人物、状況の各設定を一つの照準のなかに一致させ得た構想力、そこからサバイバルの生命力を浮彫りにしてゆく力動性。また日本の野にはこのような遺賢が存在していたのか、と驚かせるに充分である。横溝賞は、ついに望むものを得た、とさえ思う。(後略)

推理小説ではないがおもしろさを買う

角川春樹

この「賞」を設定してから第三回目を迎えたわけだが、「本格推理小説のみならず、幅広いジャンルの横溝賞を……」という当初の目論見どおり、今回、受賞作と決定した平龍生氏の『脱獄情死行』は、推理小説ではないのだが、筆力の旺盛さとスピード感あるストーリー展開に、正直いつて舌を巻いた。雪の積つた山深い鉱山の飯場から、湯気のたつている雑炊やらお惣菜を盗み出し、荒くれ男たちに追いたてられるヒロインの、動物的な眼のギラつきが、まるで見ているかのように想像されるからおもしろい。現代的にいえば、まさに映像的なのである。欲望のおもむくままに逞しく「女そのもの」を演じながら、短い一生を終えた「妖婦」の世界が直接的に伝わってくるのは、相当の筆力がないと出来ないことだ。今後が、大いに期待できそうだ(後略)

すまじい女的情念

中島河太郎

候補作品五篇のうち、まず光藤氏、速水氏、

平氏の三篇を残した。(中略)平氏の『脱獄情死行』は戦時下を背景にしていた。木地小屋に生まれ育った女が、本能に任せて生き抜こうとする姿が熱っぽく捉えられている。殺人を犯し脱獄を遂行する主人公は、国を挙げての戦争を白眼視し、ひたすら情事に没頭する。殊に脱走兵と邂逅してからは、二人だけの別天地を営み愛欲をほしきままにするが、屍蛾化した前の情人へも綿々と思慕を絶やさない。播但地方の風土と環境、それに日ましに激化する戦時下の様相を対比させながら、すさまじい女の情念を存分に描いた犯罪小説の異色作として、本篇を推した。私は一方ではこれまでの謎解き小説を抜きん出た作品を待望しているのだが、類型を脱することはなかなか難しいかもしれない。だが、それにもめげぬ新しい世代の挑戦を念願している。

選評

夏樹静子

候補作五篇の中では、『脱獄情死行』に最も強い印象を受けた。作品の迫力、文章の安定感なども、群を抜いていた。ただ、この小説が横溝正史賞の受賞作にふさわしいかどうかという点では、正直なところ大分考えさせられた。淫乱の血をひく女主人公が、昭和十五年から二十年の戦時下にて、どこまでも性の歓びを追求しつつ、犯罪を重ねていく物語である。執拗なセックス描写も随所に出てきて、どこまで必要だろうかと首を傾げることもあったが、しかしそんなヒロインの生き方を、戦争へのアンチテーゼと読みとてみれば、全篇が鮮烈な生彩を放ちはじめ。戦時中の制

度や社会情勢には入念な調査が行き届いていて、ディテールの確かさが作品を強くしている。終りに近づくにつれ、いよいよ筆が冴え、銀山廃坑の描写など鬼気迫るものがある。欲をいえば、最後の展開にもうひとつ盛り上がりがほしかったように思われる。(中略)今年は戦時中の事件をテーマにした作品に優れたものがあり、異色作が受賞に決まったが、現代社会に根ざした本格推理の傑作も期待したい。